



ふじはら たつし
藤原 辰史氏

1976年 北海道旭川市生まれ、島根県横田町(現奥出雲町)出身。現在、京都大学人文科学研究所教授。博士(人間・環境学)、歴史家。2019年2月 第15回日本学術振興会賞受賞。水俣病にも見識深く、水俣病は現代史を語る上で欠かせない普遍的問題であり、重要な世界史的出来事であると語る。

【主な著作】

- 『ナチスのキッチン―「食べること」の環境史』
(水声社→決定版=共和国、2012年→2016年、第1回河合隼雄学芸賞)
- 『戦争と農業』(インターナショナル新書、2017年)
- 『食べるとはどういうことか―世界の見方が変わる三つの質問』(農文協、2019年)
- 『分解の哲学―腐敗と発酵をめぐる思考』(青土社、2019年、第41回サントリー学芸賞)

トークセッション | 登壇者紹介

おおた かずひこ
太田 和彦氏
(南山大学准教授)

南山大学総合政策学部准教授。1985年生、博士(農学)。専門は、食農倫理学、環境倫理学、シリアスゲーム。「大加速」とその鈍化が、より持続可能なフードシステムへの移行を研究。多様な立場の人々が社会課題を共に学ぶ場づくりのためのツールとして、シリアスボードゲームの開発・活用も行う。
訳書に、ポール・B・トンプソン『食農倫理学の長い旅』(2021年、勁草書房)。共編著書に、太田和彦・吉永明弘『都市の緑は誰のものか』(2024年、ヘウレーカ)。ゲームに「フードダイバーシティ・ポーカー」(2024年)など。



すぎさき いつこ
杉崎 伊津子氏
(あいち子ども食堂ネットワーク元共同代表)

わいわい子ども食堂プロジェクト運営委員長。国家公務員として旧社会保険庁(現・日本年金機構)にて医療・年金の行政事務に携わりながら社会保障運動の末端で活動し、定年退職後は、北医療生活協同組合副理事長に就任・その後監事を歴任して役職定年により退任。北医療生活協同組合員活動として子育て世代への支援として乳幼児のフリースペースを開設、その活動からわいわい子ども食堂プロジェクトの発足へとつながる。地域において子育て世代とのつながりのなさを感じていた時に、子ども食堂という活動を知り、「これならやれる」と思い、スタートさせて10年目になる。



ふじい えり
藤井 恵里氏
(ワーカーズ・コレクティブ ネットワーク ジャパン代表)

1989年、生活クラブ生活協同組合に加入、2001年度～2003年度生活クラブ生協理事。2002年、名古屋で開催した「ストップ遺伝子組み換えイネ全国大会」に参加し、全国の仲間と58万筆の署名を集め、愛知県によるモンサント社との共同研究を中止に追い込む。
2004年、仲間の生協組合員と一緒に、生協業務を担うワーカーズ・コレクティブ グランを設立。2023年度から労働者協同組合ワーカーズ・コレクティブ グランに。みんなが平等な立場で出資し、経営し、働くワーカーズ・コレクティブ(協同労働)という働き方を実践し、社会へ広げる運動に取り組む。2018年～ワーカーズ・コレクティブの全国組織であるワーカーズ・コレクティブ ネットワーク ジャパン代表。



ふじなが いくみ
藤永 伊久美氏
(Foods for Children愛知代表)

豊田市在住、1男児の母専業主婦。2016年に悪性リンパ腫ステージ4を発病。病気の原因を調べるうち、食品に含まれる化学物質などが身体に影響することを知る。農薬がミツバチの減少を招いたり、私達を取り巻く環境に絶望を感じていたが、自然の偉大さ・言霊の力・素晴らしい人々との出会いが希望となり、活動の原動力となった。
2019年に「Foods for Children愛知」を立ち上げ、オーガニック給食を普及するフォーラムや有機農家さんの応援、署名活動、行政への働きかけなどを行っており、各地に仲間が広がっている。



水俣・写真家の眼

1960年から写真家が撮影した20万点を超える水俣病関連の撮影原版、オリジナルプリント、デジタルデータ、取材ノート等の長期一括保存を目指し、2022年4月に一般社団法人として設立。

9人の写真家(桑原史成、塩田武史、宮本成美、アイリーン M.スミス、石川武志、北岡秀郎、小柴一良、芥川仁、田中史子)が賛同。水俣病関連写真をアーカイブ化し、水俣病関連の写真記録を「人類の遺産」として次世代に残すための活動を続けている。撮影した時代も撮影スタイルも異なる写真家集団が活動を共にしている。今回は、写真家・芥川仁の写真を会場内に展示する。



会場アクセス図

地下鉄名城線「八事日赤」駅
①番出口より徒歩8分
または
地下鉄鶴舞線「いりなか」駅
①番出口より徒歩15分

